

ティームール朝の書家 ジャアファル・バーイソンゴリーの「上申の書」

和訳，解説，サライ・アルバムにおける意義

ヤマンラール水野美奈子

▶キーワード

サライ・アルバム	イスラーム美術
イスラーム書道	ティームール朝美術
ジャアファル・バーイソンゴリー	
ヤアクーブ・ベク	白羊朝
トプカプ宮殿美術館	上申の書

▼要旨

本小論は、トプカプ宮殿美術館が所蔵する4冊の詩画帳（サライ・アルバム）の1冊（登録番号H.2153）のフォリオ98aに貼られている「上申の書」に関するものである。この「上申の書」は、15世紀前半のティームール朝支配者バーイソンゴルの宮廷図書館長を務めた能書家ジャアファル・バーイソンゴリーに帰せられる書で、当時の図書館付属工房で作製中の写本、絵画、諸工芸、建築装飾、テントなどの作業状況をバーイソンゴルに報告した文書である。ティームール朝美術史にとって貴重な資料であり、英訳、トルコ語訳及びその用語解説が出版されている。ティームール朝のみでなくイスラーム美術史全般においても重要な文献であるので、和訳を試み、先行研究では不明瞭であった用語を解明し付した。また本「上申の書」はこれまで、当該詩画帳（サライ・アルバム）との関連の中で論じられることはなかったが、本論では「上申の書」を詩画帳の作成意図も考慮に入れて考察する必要性があることに言及した。

序

トプカプ宮殿美術館が所蔵する詩画帳（登録番号H.2153）の フォリオ98aには、ティームール朝（1370-1507年）君主バーイソンゴル・ミールザーの宮廷工房長であったジャアファル・バーイソンゴリーが、君主に献上したと考えられている「上申の書」が貼られている。その内容は、15世紀前半のヘラートの宮廷工房の活動状況の報告である。

バーイソンゴル・ミールザー（1379-1433年）はティームールの孫で、国政を司る傍ら詩人・書家としても著名であり、また何よりもティームール朝芸術の高揚期のパトロンとして知られていた。宮廷図書館に付属する工房で製作された美術は、後世のイスラーム世界にも多大な影響を与えたことから、この時代の工房の動向を記した「上申の書」はイスラーム美術史研究において極めて重要な史料である。

トプカプ宮殿美術館には、オスマン帝国（ca.1299-1922年）の宮廷生活で使用された書籍・美術工芸品が収蔵されているが、収蔵品の中には他のイスラーム諸王朝からの献上品や戦利品も多い。本小論の「上申の書」が貼られている詩画帳（H.2153）も、16世紀前半にイランのサファヴィー朝（1501-1722年）からオスマン帝国に献上された通称サライ・アルバムと言われる4冊の詩画帳の中の1冊である¹⁾。しかし詩画帳が編纂されたのは、白羊朝（1378-1508年）ヤアクーブ・ベク（1478-1490年）の宮廷と考えられており、14世紀から15世紀にイラン、中央アジアなどのイスラーム世界で製作された絵画や書が厚紙に貼られたアルバム形式の作品である²⁾。

これら4冊の詩画帳に貼られた絵画は、画法、画題、画面のサイズなどにおいて、イスラーム絵画の主流をなす写本の挿絵とは異なった傾向の絵画が多いことから、イスラーム美術史の研究が欧米で始まった当初から注目されていた³⁾。また書に関しては、Z.V.トガンなどの書誌学者によって早くから大局が把握されている⁴⁾。

イスラーム美術に関する文献史料は少ないので、4冊の詩画帳に残された絵画に関する記述は注目され、それらの翻訳・解説は近年に至るまで断続的に行われている。サライ・アルバムの欧米への紹介と共に早い時期から注目されたのは、H.2154のバフラム・ミールザーの詩画帳の序文として書家ドゥースト・モハンマドによって書かれた「書家・画家列伝」である⁵⁾。次いで注目されたのが本小論で取り上げたH.2153のジャアファル・バーイソンゴリーの「上申の書」である。M.K.オゼルギンは「ティームール朝美術に関する古文書：タブリーズ出身のジャアファルによる上申」と題する論文において、ほぼ原寸大の原文とテキスト（活字版）に現代トルコ語訳と詳細な解説を付している⁶⁾。W.M.タクストンは、『書家・画家列伝に関するアルバムの序文と文書』と題する著書の中で、「上申の書（報告書）」として、原文テキスト（活字版）に英訳、解説を付している⁷⁾。I.アフシャールは、「図書館に従事している者たちの上申書」と題する論文で、活字版と用語索引を付している⁸⁾。A.パールサーイー・ゴドゥスは、「ヘラートのバーイソンゴルの図書館におけるティームール朝の芸術活動に関する文書」と題する論文において、原文図版とペルシア語テキストを付し、M.K.オゼルギンとほぼ同様の文書解説をしている⁹⁾。

M.K.オゼルギンとW.M.タクストンの翻訳と解説は、「上申の書」に記載された15世紀前半のティームール朝宮廷工房の書家、画家、諸工芸師の特定、制作中の写本の同定などに焦点が当

てられ、時代の美術の動向に貴重な情報を提供している。用語解説に関して、M.K.オゼルギンはかなり詳細で多角的な考察を行っており、本小論においても参考にしたものが多いが、W.M.タクストンは、西洋美術や絵画の用語を訳語に当てていることも多く、イスラーム美術や絵画の説明には不十分な点があることも看過できない。W.M.タクストンは、上記著書を出版する前に、W.T.W.レンツ・G.D.ロウリー著『ティームールとその王者的ヴィジョン：15世紀のペルシア芸術と文化』の補遺に「上申の書」の全文の英訳を掲載している¹⁰⁾。

『ティームールとその王者的ヴィジョン』は、ティームール朝美術全体を包括する画期的な専門書であるが、ティームール朝バーイソングル時代の工房の動向や書画・工芸の作業工程の一端を明らかにしている「上申の書」が、ティームール朝美術史研究の重要な資料であることを示している¹¹⁾。

本小論は、上記先行研究を踏まえた上での、下記のような新たな研究課題への試論と今後の課題の提唱である：1) 日本語への翻訳において、上記先行研究において解釈が保留されていた幾つかの用語に関する解釈 2) 「上申の書」に記された宮廷工房の作業過程から導き出されるイスラーム美術の特質 3) 白羊朝ヤアクーブ・ベクによって編纂された2冊のサライ・アルバム(H.2153とH.2160、作品総数2158点)の中での「上申の書」の位置づけ。

なお本研究課題では、書家・画家の特定や写本や製作品の同定には立ち入らない。

ペルシア語テキスト(活字版)作成と、ペルシア語解釈などに関して、筆者が代表する科研費研究の共同研究者である関喜房氏から多大な助言を得た。ここに感謝の辞を表示したい。

I. 「上申の書」概要

本小論の「上申の書」は、序で述べたように、白羊朝の支配者ヤアクーブ・ベクが編纂を命じたと考えられている詩画帳H.2153の98フォリオaに3点の絵画と共に貼られている。(図1、2)「上申の書」の紙のサイズは縦46cm、横13.5cm、紙は白、ペルシア語で書体はナスターリーク、文字のサイズはケターバトである。文面は序文、絵画・工芸、王の建造物、テントの4部から構成され、本文は3段落である。絵画・工芸の部分にはタイトルは無いが、序文、王の建造物とテントの部分には、タイトルが記されている。

筆者名の記載は無いが、ジャアファル・バーイソングリーが1420年以降にバーイソングルの図書館長の職務にあったこと、「上申の書」で報告されている作品の製作年代が彼の職務期に相当することなどから、この「上申の書」がジャアファル・バーイソングリーによってバーイソングルに献上された報告書であることは、ほぼ間違いないとされ

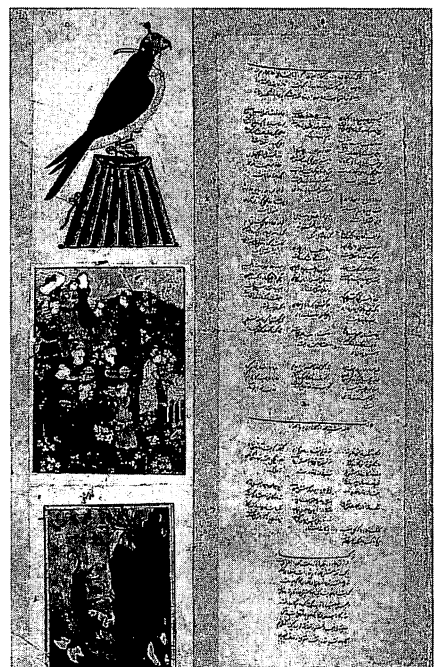


図1 H.2153のフォリオ98a全頁

ている¹²⁾。しかしこの「上申の書」がバーイソングルに献上されたものと同一であるかどうかは不明である。本「上申の書」は、献上した原本の写しである可能性も高い。今後の課題として、当時の文書の形式などとの比較研究が必要である。H.2153の詩画帳には、献上者も内容も異なる上申書が、本件以外に3点あり、後に述べるようにそれらとの比較研究も今後の課題である。

また本「上申の書」が、ジャアファル・バーイソングリーの直筆であるか否かに関して、M.K.オゼルギンは、ジャアファル・バーイソングリーの他の直筆の作品と比べて、この「上申の書」が彼自身の手になるものと断定している¹³⁾。

筆者が代表を務めるサライ・アルバム研究会がトブカブ宮殿美術館で行った調査において、ペルシア語文書を担当した関喜房氏によれば、H.2153とH.2160の2冊の詩画帳において、ジャアファルの書は「上申の書」以外に20点が数えられる¹⁴⁾。

「上申の書」には、筆写年代は記されていない。M.K.オゼルギンは、「上申の書」(A)の1)に記されている『薔薇園』と6)の『論文集』が完成間近かであること、及び序文に断食に関する記述があることから、「上申の書」の執筆時期をH.830年の断食月(1427年6月26日～7月25日)としている¹⁵⁾。しかし上記2冊の奥書の年代は書家による筆写の終了した年代であり、必ずしも写本製作の完成時とは一致しないので、「上申の書」の執筆時期を奥書の年代と断定することは出来ない。しかし「上申の書」の献上は、1434年のバーイソングルの死去後とは考えにくいし、また製作過程にある作品がバーイソングル時代の代表作を含むことを考慮すれば、その執筆時期は1420年代後半と考えられよう。

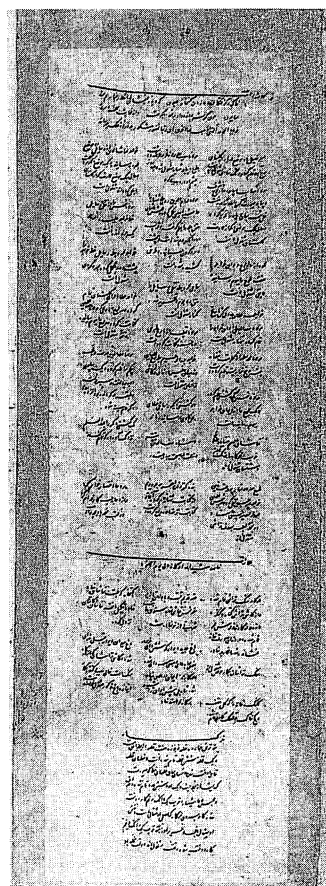


図2 H.2153 フォリオ98aの部分「上申の書」

II. 「上申の書」原文テキストの活字版

この原文テキストの活字版の作成は関喜房氏による。本活字版は、原文の形式に従っているが、算用数字はIII.における和訳と、解説・用語説明のために便宜上付けられたものである。

活字版 注

ケターバトの大きさを持ってナスタアリーク体で書かれたこの上申書におけるペルシア語の正書法は、幾つの特徴を有しているので、それらを本稿での扱いとともに以下に記す。

عن خاک بر گرفتگان و ملازمان کتبخانه میمون که دیده ایشان در انتظار غبار سم سمند
همایون " چون گوش روزه دار بر الله اکبرست " و از غایت بهجت و سرور
فریاد « الحمد لله الذی اذهب عنا الحزن ان ربنا لغفور شکور » بر ذروه فلک میسرانند

- 1- امیر خلیل دو موضعه دریا از گلستان 2- مولانا علی روز تحریر عرضه داشت 3- خواجه غیاث الدین از رسایل دو موضع موج آب تمام کرده برنگ نهادن مشغول بطرح دیباجه شهنامه مشغول شدو چندروز چشم او درد می کرد و حالی بیک موضع عمارت که از گلستان خواهد شد
- 4- مولانا شهاب دیباجه و چهار لوح و شرف دیباجه صورت گری را طلائیه و هشت نعل شمس میان دیباجه را تحریر کرده و حالی بیک موضعی دیگر از عمارت گلستان مشغول است
- 5- مولانا قوام الدین روی جلد شهنامه را حاشیه اسلیمی مکمل کرده و عیش نماشای متن جلد را بقلم گرفت و قریب دو دانگ بوم شده است و پشت و سر و گردن چسبانیده و طریق کشیده شده است
- 6- مولانا شمس را از نقل رسایل خط خواجه علی رحمه الله یک جزو مانده است
- 7- محمود از ده لوح دیوان خواجه هفت لوح را بیوم رسانیده
- 8- حاجی محمود جلد نقل رسایل را متن رو بوم و تحریر شده بگزار مشغول است
- 9- خواجه محمود جلد رسایل خط خواجه را پشت و رو مکمل کرده بسر و گردن مشغول است
- 10- خواجه عطای جدول کش تاریخ مولانا سعدالدین و دیوان خاجو را تمام کرده بشهنامه مشغول است
- 11- مولانا قطب از تاریخ طبری ده جزو کتابت کرده است
- 12- خواجه عطا اجزای گلستان تمام کرده و سه لوح تاریخی که مولانا سعد الدین کتابت کرده دو لوح را بیوم رسانیده به تتمه مشغول است
- 13- مولانا محمد مطهر از کتابت شهنامه بیست و پنج هزار بیت تمام کرده است
- 14- خواجه عبدالرحیم بطروح مجلدیان و مذهبیان و خیمه دوزان و کاشی تراشان مشغول است
- 15- مولانا سعد الدین صندوقچه بیگم را تمام کرده و یک پهلوی او به پرداخت رسانیده است و طبقه در که مانده بود پانزده روز دیگر تمام می شود
- 16- مولانا شمس یک کشتی تمام کرده و یک لوح را از دیوان خاجو بیوم رسانیده است
- 17- دو کشتی دیگر را حاجی و خطای بکل کاری رسانیده اند
- 18- یک کشتی دیگر را عبدالسلام نزدیک آورده که تمام کنند
- 19- نقاشان باجمعهم هفتاد و پنج خوب خرگاه را برننگ آمیز و شستمان مشغول اند
- 20- استاد سیف الدین بسلامتست و زحمت او بصحت مبدل شد
- 21- طرح میرولتیار بود جهت زین خواجه میرحسن نقل کرد و میرشمس الدین پسر خواجه میر حسن و استاد دولتخواج بصدف تراشی مشغول اند
- 22- بنده کمتر و نذره احقر سه جزو و نیم از کتابت شهنامه تمام کرده آغاز کتابت نزهة الارواح کرده است
- 23- بر دعا اختصار خواهم کرد و از دعا به چه کار خواهم کرد دولت مخلص باد بمحمد و آله

1- درگاه سنگ تراشی تمام شده و از کاشی تراشی کتابه و کنگره مانده و در کارند و فرش ممر تمام شده و در دندان صورت خانه نش_____انده شده و مخارجۀ نهاده	2- قصر قدیم قَبّۀه و بادامن تا زیر مقرنس نقاشی شده سـِتُون جانب شرقی از نو نهاده شـ_____د	3- کتبخانه که جهت نقاشان بنیاد نهاده تکمیل یافته نقاشان و کاتبان نزول کرده
4- سنگ تراشان بکارحوض مشغول اند	5- باغ جدید دیوار که شش دای فرموده بعضی چهار دای و بعضی سه دای شده و در کارند ایوان و دالان بنیاد شده شاه پل پیش ایوان تراشیده بر کار خواهند نهاد	6- باغ میدان دیوار قبلی سه دای شده و کاشی تراشان که از درگاه سنگ دست خالی می کنند بکار ایزارۀ باغ مذکور مشغول خواهند شد
7- کلنگ خانه را که گل سقف و گچ خاک و آهک کاری تمام شد		

1- بقه ترلقی چهارده قطعه و بَوَـرَه هفت قطعه از جمله این بیست و یک قطعه شش قطعه تمام شده است 2- و نعلهای قطعه تمامی دوخته شده 3- و شمسهای میان قطعههای خط که صورت گریست از جمله بیست و یک عدد شش عدد تمام شده 4- و شرف و محبس و حاشیه‌ها را قریب یک دانگ و نیم کار دوخته شده 5- کار بیـــرون خرگاه که اصل او مثقالی است و نقش او صندل باف و تحریر او زَر حقه قریب یک دانگ و نیم کار دوخته شده به نتمـــه مشغول اند 6- دولت مخد باد

- 1 - گ (gāf) の文字は、原文ではすべて ک (kāf) で書かれているが、本稿の活字版では گ で写した。
- 2 - چ (che) の文字は、時に ج (jīm) で書かれているが、本稿では چ で記した。
- 3 - 多くの単語において、点 (nuqtah) が打たれていない文字が見られるが、本稿ではオゼルギン版やタクストン版、アフシャール版を参照しつつ明らかな限り、すべて、点を補足して印字した。ただし、今日まで意味があいまいなままになっている装丁や建造物に関する技術用語については写本に書かれているままに写した。

原文は、以下の４部から成っている；序文（タイトル有り）、書画・工芸部門（原文と活字版にタイトルは無いが、訳文においては（Ａ）とした。）王の建造物（タイトル有り、訳文では（Ｂ）とした。）、テント（タイトル有り、訳文では（Ｃ）とした。）和訳は原文の順序に従い、原文にはないが各部の中の項目ごとに）カッコで番号を付した。また訳文の中の〔 〕カッコは筆者が、説明や用語解釈のために入れたもので、原文と活字版にはない。

上申の書 [1]

(序文) [2]

王の筆写の館 [3] の卑しき僕達とそれに付き添う者たちからの (上申の書)。

彼らの目は、王の栗毛の馬の蹄から (立ち上る) 埃を待ち焦がれる。“あたかも断食する者の耳が、神は偉大なり” [4] の呼びかけの声を待つように。喜びと歓喜の極まりから “ああ有難い、有難い、アッラーが一切の悲しみを取り除いて下さった。まことに、われらの主はなんでもよく赦してく下さるお方。(こちらのした善事には) すぐ感激してくださるお方。(『コーラン』35章-34節)¹⁶⁾” という叫びが天の最高峰に達するように。

[1] 上申書 = ‘arṣah-dāsht は、献上される報告書を意味するが、それに続く序文とも解釈できる文面とともにタイトルとなっている。

[2] 序文という題目は無いが、内容からこの報告書の序文に相当すると考えられる。

[3] kutubkhānah-i humāyūn : 王の図書館を意味するが、イスラーム世界での宮廷図書館は、写本製作や諸工芸・建築・建築装飾などの工房も兼ね備えた施設であることが多い。なおここでは、humāyūn (王の) と読んでいるが、maymūn (吉兆の) と読むことも可能である。W.M. タクストン、I. アフシャールは humāyūn と読み、M.K. オゼルギン、A. パールサーイー・ゴドゥスは後者の読みを取っている¹⁷⁾。

[4] Sa’dī のガザルの半行からの引用¹⁸⁾。

(A) (書画・工芸)

1) アミール・ハリール [5] は、『薔薇園』(ゴレスターン) [6] の二つの海の場面の波水を完了したので、彩色に携わることになるであろう。

[5] アミール・ハリール (Amīr Khalīl) : バーイソングルの宮廷画家として著名。ドゥースト・モハンマド (Dūst Muḥammad) が1544年に記した書家・画家列伝において、アミール・ハリールがバーイソングルに非常に気に入られていたこと、彼の宮廷工房で具象絵画(タスヴィール)と装飾(タズイーン)に従事していたことを述べている¹⁹⁾。

[6] 『薔薇園』(Gulistān) : 著者サアディー (Sa’dī) によって1258年に完成したこの作品はペルシア文学作品として著名で多くの写本が製作された。M.K. オゼルギンはこの『薔薇園』が、現在チェスター・ビーティー図書館の所蔵する登録番号MS119の写本と考えている。その論拠は、この写本がH.830年(1426-27年)ジャアファル・タブリーズィーによって筆写を終えられていること、8点の挿絵の中に海の描写が含まれていることなどである²⁰⁾。W.M. タクストンは、「上申の書」に記録されている他の作品に比べて数年早いとしながらも、上記チェスター・ビーティー図書館の『薔薇園』である可能性も指摘している²¹⁾。

2) モウラーナー・アリー [7] は、「上申の書」が書かれた日、『王書』(シャー・ナーメ) [8] のディーバーチェ(巻頭見開き頁) [9] の下絵 [10] に携わっていた。この数日、彼の目は痛みを感じている。

- [7] モウラーナー・アリー (Mawlāna ‘Alī) : バイソングルの宮廷図書館工房の画家。
W.M. タクストンは、ドゥースト・モハンマド著「書家・画家列伝」でバイソングルの代表的画家として挙げられているハージェ・アリー (Khawājah ‘Alī) がこのモウラーナー・アリーと同一人物である可能性を指摘している²²⁾。ドゥースト・モハンマドはハージェ・アリーに具象絵画師を意味するモサツヴェル (muṣavvir) というタイトルを与えている²³⁾。
- [8] 『王書』 (Shāh-nāmah) : フェルドウスイー (Firdawsi) (935?-1020年?) によって著されたイランの英雄叙事詩で、イラン文学として人気を博し非常に多くの写本が製作され、現存するものも多い。「上申の書」においては、2)、5)、10)、13)、22) の5箇所『王書』の書名が見られる。本文の『王書』の写本に關しW.M. タクストンは言及していないが、M.K. オゼルギンは、H.831年 (1427-28年) に完成し、バイソングル・ミールザーも自ら製作に係わったと言われているテヘランの個人蔵の作品である可能性を指摘している²⁴⁾。
- [9] ディーバーチェ (dībāchah) : ここでは、写本の巻頭の見開き頁、巻頭の装飾部分。通常、金色と紺色が主色の豪華で繊細な文様絵画から構成される。M.K. オゼルギンは「ディーバーフ＝豪華に装飾された」を語源に解し、写本の巻頭に述べられる讃辭に満ちたきらびやかな語句から構成される序文を表す語としても使用されるようになったとしている²⁵⁾。例えば本論でしばしば引用するドゥースト・モハンマドの「書家・画家列伝」は、サファヴィー朝第2代シャー・タフマースプの弟バフラーム・ミールザー (1517-49年) の宮廷工房で製作された詩画帳 (モラツカア) のディーバーチェ (巻頭序文) として描かれたもので、過去の書家・画家の列伝を列挙し長文となっているが、バフラーム・ミールザーの宮廷工房の正統性を讃美する意図があったと考えられる。
- [10] タルフ (tarḥ) : 写本装飾用語として以下のような数種類の意味を有する：a) 具象絵画や文様絵画の構成 b) 下絵 c) 料紙装飾。本文では、ディーバーチェ (巻頭装飾部) のタルフであるので、文様絵画の下絵である可能性が高いと考えられる。画家が目を傷めるほど精緻な文様絵画であったことが想像できる。

3) ハージェ・ギヤーソッディーン [11] は、『論文集』 (ラサーイル) [12] の二つの場面を完成させた。そしてもう一つの場面も完成に近い。そして今は、『薔薇園』 [13] のなかで承認されなかった建物の場面に携わっている。

- [11] ハージェ・ギヤーソッディーン (Khawājah Ghiyath al-Dīn) : 具象絵画家。ティームール朝から中国へ送られた諸使節団の中で、バイソングルが派遣したソルターン・アフマドに同行した画家ハージェ・ギヤーソッディーンである可能性が高い。彼は1419年にヘラトを出発、1422年ヘラトに戻り、使節団の記録を執筆した²⁶⁾。
- [12] 『論文集』 (Rasāyil) と題する写本は「上申の書」の4箇所 (3)、6)、8)、9)) に現われる。この内、6) と9) は、後述するとおり、死去したハージェのものであるので同一の『ラサーイル』であることが分かるが、3) と8) に関しての著者は不明である。

[13] 『薔薇園』：これは1) の [6] で説明したものと同一である可能性が高い。

- 4) モウラーナー・シェハーブ [14] は、巻頭装飾、4つの長方形装飾（ロウフ）[15]、巻頭装飾の矢飾り部分 [16] の図柄 [17] に金彩を置いていた。巻頭装飾の中央の太陽文飾り [18] の8つの区割り部を描いて、輪郭取り [19] をした。そして今、『薔薇園』[20] の建物のもう1つの場面に携わっている。

[14] モウラーナー・シェハーブ (Mawlānā Shihāb)：文様絵師。『薔薇園』の建物そのものを描いていれば具象画家でもある。

[15] 長方形装飾（ロウフ）(lawḥ)：写本の頁の中の区画割の形式の1つで、長方形の枠組の中は文様絵画や書で充填される。写本以外の造形分野でも、長方形の枠組一般をロウフという。現在ではキャティーベとも言われる。

[16] 巻頭装飾の矢飾り部分（ショラフェ・ディーバーチェ）(shuraf-i dibāchah)：巻頭頁の上部の装飾（ディーバーチェ）の上部に施される矢形の文様部分。

[17] 図柄 (ṣūratgari)：原文ではスーラトギャラリーという用語である。スーラトギャラリーは、一般的に具象的絵画を表すが、巻頭装飾は通常文様モチーフのみで構成されるので、なぜスーラトギャラリーという用語が使用されたのか不明である。しかし15世紀後半の作例²⁷⁾には長方形装飾（ロウフ）に小さな鳥などが描かれることもあるので、そのような具象的モチーフが含まれていた可能性も否定できないので、和訳では図柄とした。

[18] 太陽文様 (shamsah)：シャムセ（太陽）といわれるモチーフで、円文または楕円文の形態を取るが、中心から放射状に伸びる多弁型装飾（ナアル）から構成されることが多い。なお楕円文の場合はトランジュといわれることもある。

[19] 輪郭取り (taḥrīr)：イスラームの文様絵画は着色や金彩が置かれた後、きわめて細い墨線で輪郭が描かれる。具象絵画でも通常は着色後に輪郭線が取られる。ただし“描く”、“書く”という意味でも用いられる。

[20] 『薔薇園』：1)、3) に同じ作品である可能性が高い。

- 5) モウラーナー・ガヴァーモッディーン [21] は、『王書』[22] の表紙の上の縁飾り部分 [23] のイスリーミー文 [24] を完成させ、表表紙と裏表紙が貼り合わされ [25]、ほぼ3分の1が地紋で充填された。さらに小口カバー [26] も貼り合わされた、そして空押し [27] が施された。

[21] モウラーナー・ガヴァーモッディーン (Mawlānā Qiwām al-dīn)：装丁師。ドゥースト・モハンマドの「書家画家列伝」では、バーイソンゴルによってタブリーズから招聘された装丁師として挙げられている²⁸⁾。

[22] 『王書』：この作品が2) と同一の作品であるかに関して、M.K.オゼルギンもW.M.タクストンも言及していない、しかし2) に記されている『王書』は、バーイソンゴル工房の代表作であり、大部で、きわめて念入りに製作された作品であることを考慮す

ると、当時工房で複数の『王書』が同時に作成されていたとは考えられにくく、2) および10) に述べられている『王書』と同一作品の可能性が高い。

[23] 縁飾り部分 (hāshiyah) : 表紙の上下左右の帯状の飾り部分

[24] エスリーミー文 (islīmi) : イスラーム世界の主要文様は7種あるとされているがエスリーミー文は其中で筆頭に上げられる基本文様で、様式化した葉 (半パルメット文) と蔓からなどから構成され、非常に多くのヴァリエーションがある。トルコではルーミー文と言われる。

[25] 表紙 (jild) : 写本を構成する部分の主要部。イスラーム世界の写本の表紙は、表・裏・小口カバーから成り立つ²⁹⁾。

[26] 小口カバー : 前小口を保護する“首”(gardan) と五角形をなす表表紙の左側を覆う“頭”(sar) の部分。

[27] 空押し : 表紙の金箔装飾のために、はじめに熱したコテ仕様の金属の型で型押しし、文様の目印 (ṭariq, 道の意) を付ける、すなわち空押しをする作業。

6) モウラーナー・シャムス [28] には、故ハージェ [29] の直筆の『論文集』[30] の筆写 [31] の内、1つの部分 (ジュズ) [32] が残された。

[28] モウラーナー・シャムス (Mawlānā Shams) : 書家。K.M. オゼルギン、W. タクストンともに、この書家がシャムス・バーイソンゴリーとして知られていたシャムソッディーン・モハムマド・イブン・ホサーム (Shams al-dīn Muḥammad b. Ḥusām Harawī) である可能性が高いことを指摘している³⁰⁾。

[29] ハージェ (khwājah) : M.K. Özerginはこの尊称だけで表記された人物が誰であるか不明としている³¹⁾。W.M. タクストンは、ヘラートで能書家として著名であったアブドッラー・サイラフィー (Abd Allāh Sayrafī) の可能性を指摘すると共に、アルグーン・カーメリー (Arghūn Kāmīlī) やモバーラクシャー・ザッリーニングラム (Mubārakshāh Zarrīnqalam) もハージェとして知られていたことを挙げている³²⁾。

[30] 『論文集』 : K.M. オゼルギンは、この『論文集』が830年 (1426-27年) にシャムス・バーイソンゴリーが筆写した『選集』 (Anthology) (B. ベレンソン・コレクション) である可能性も指摘している³³⁾。W. M. タクストンは、この『論文集』が、上記のベレンソン・コレクションのものと同系であるとしながらも、シャムス・バーイソンゴリーが、831年 (1427-28年) に筆写したハーजू・ケルマーニーの『ホマーイとホマーユーン』 (ウィーン国立図書館蔵) の一部である可能性を指摘している³⁴⁾。

[31] 筆写 (naql) : 写本を筆写すること。

[32] 部分 (ジュズ) : ここでは写本を構成する頁の折丁。

7) マフムード [33] は、ハーजू [34] の『詩集』[35] の10の長方形装飾 (ロウフ) のうち、7つの長方形装飾の地紋 [36] を完成し、残りのものに携わっている。

[33] マフムード (Maḥmūd) : 文様絵師。文面からは、長方形装飾の地紋を描いたと考え

られる。

[34] ハーजू (khwājū) : W.M.タクストンは、このハーजूと作品の『詩集』に言及していないが、M.K.Özerginは、作品名との関連からこのハーजूが、ハーजू・ケルマーニー (Khwājū Kirmānī) の号で知られている詩人アボルアター・キャマロッディーン・マフムード・ケルマーニー (Abū al-‘Atā Kamāl al-dīn Maḥmūd al-Kirmānī) (1290-1352年) であることを指摘しているが、この写本が現存するか否かは不明としている³⁵⁾。

[35] 『詩集』 : ディーヴァーンといわれるイスラーム文学の詩集。主にガザルやガスィーデを集めたもの。

[36] 地紋 (būm) : ブームは、地を意味するので、長方形装飾では文様絵画によって充填された地紋と解釈した。当時の長方形装飾での一般的に施された地紋は蔓草文様 (エスリーミー)、渦巻き型蔓草文様などである。地紋には文字が含まれることも多い。

8) ハーजू・マフムード [37] は、表面が (厚紙で) 埋められて [38]、その上に (文様が) 描かれた [39] ところの『論文集』 [40] の表紙 [41] の仕上げに取り掛かっている。

[37] ハーजू・マフムード (Ḥājī Maḥmūd) : 装丁師。イスラーム世界の写本の製作に係る工人は以下のように分類できる ; ①頁の枠組みを構成し、線を引く枠組み師 (ジャドヴァルキャシュ) ②本文を筆写する書家 (ハッタート) ③装飾の文様を描く文様絵師 (モザッヘブ) ④挿絵を描く具象絵師 (モサツヴェル、スーラトギャル、ナッカーシュ、ラッサームなど³⁶⁾) ⑤製本と表紙装飾を施す装丁師 (モジャッレド)³⁷⁾

[38] 表面が (厚紙で) 埋められて (matn-i ru būm) : 表紙の革を削り抜いて、そこに厚紙をはめ込み、文様を施し、上からワニスを塗る表紙の製法工程。

[39] 描かれた (taḥrīr shudah) : タフリール (taḥrīr) は、4) の19) では輪郭取りという絵画技法として使用されたが、ここでは '描かれた' という意味。

[40] 『論文集』 : この『論文集』は、3) の『論文集』と同一である可能性が高い。「上申の書」において『論文集』は4回の記載を見るが (3)、6)、8)、9)、6) と9) は故ハーजूの同一本であり、次の9) はやはり表紙の工程を明らかにしているので、この8) と同本とは考え難い。

[41] 表紙 (jild) : jildは製本、表紙、表紙装飾なども含む。本文では表紙をさす。5) の[25] を参照。

9) ハーजू・マフムード [42] は、ハーजूの『論文集』 [43] を筆写した写本の表紙の表表紙と裏表紙 [44] を完成させ、今小口カバー [45] を製作している。

[42] ハーजू・マフムード (Khwājah Maḥmūd) : 装丁師

[43] 『論文集』 : ハーजूの『論文集』が筆写された写本。6) と同一本と考えられる。

[44] 表表紙と裏表紙 (posht va rū) : イスラーム世界の写本の表紙は、表表紙と裏表紙を別々に作り、背の部分で両方を貼り合わせるのが習慣である。

[45] 小口カバー (sar (頭) va gardan (首)) : イスラームの写本の表紙の部分は表表紙と裏表紙、前小口を保護する小口カバーから成り立つ。

- 10) ハージェ・アターイ [46]・ジャドヴァルキャシュ (枠組み師) [47] は、モウラーナー・サアドッディーンの歴史書 [48] とハーजूの『詩集』 [49] を終え、『王書』 [50] に取り組んでいる。

[46] ハージェ・アターイ (Khawājah Aṭāy) : 枠組み師

[47] 枠組み師 : 枠組みは、写本製作の重要な工程である。頁の本文部に大枠が引かれ、次に本文部を区分けする枠組み、装飾文様、挿絵などの部分の枠組みが、引かれる。枠組みの線は、墨 (黒)、や金が基色であるが、朱、青、緑などの線が複数並行して引かれることも多い。頁の枠組みは写本に特色を与えるので、写本製作では重要な独立した分野であり、枠組み師という専門の工人職が存在した。

[48] モウラーナー・サアドッディーンの歴史書 : W.M. タクストンはこの歴史書が、サアドッディーン・マシュハディー (Sa'd al-Dīn Mashhadī) が、H.834年に筆写したジュワイニー (Juvaynī) 著『世界征服者の歴史 (Tārīkh-i Jahāngushāy)』(サンクト・ペテルスブルグの Publichnaya Biblioteka PNS 233) である可能性が高いことを指摘している³⁸⁾。

[49] ハーजूの『詩集』 : 1つの工房で、ハーजूという尊称だけで表現される著者の同一作品が同時に複数製作されたとは考えにくいので7)の[34]の作品と同一作品であると考えられる。

[50] 『王書』(シャー・ナーメ) : 2)の[8]、5)の[22]を参照。

- 11) モウラーナー・ゴトゥブ [51] は、タバリーの歴史 [52] の2つの部分を書き上げた。

[51] モウラーナー・ゴトゥブ (Mawlānā Qutb) : 書家。W.M. タクストンは、この書家を、ゴトゥブッディーン・イブン・ハサンシャー・ケルマーニー (Qutb al-dīn b. Ḥasanshāh Kirmānī) としている³⁹⁾。

[52] 『タバリーの歴史』 : W.M. Thachstonは、本文のこの歴史書が、タバリー (839-923) のバルアミーによるペルシア語訳とし⁴⁰⁾、サンクト・ペテルスブルグ在 Publichnaya Biblioteka が所蔵する pns.49であることを指摘している⁴¹⁾。

- 12) ハージェ・アター [53] は、『薔薇園』 [54] のジュズ (複数) を完成させた。モウラーナー・サアドッディーンが筆写した歴史書 [55] の3つの長方形装飾 (ロウフ) のうち2つの地紋を終え、完成に没頭している。

[53] ハージェ・アター (Khawājah Aṭā) : ジュズを完成させたという文面から、アターが書家である可能性が高い。地紋 (būm) は、長方形装飾を埋め尽くす地紋の総称と考えられる。イスラームの写本装飾の長方形装飾では、地紋は文様と文字から成り立つ

ており、画家が行うのは文様の部分で、書家が担当するのは文字の部分である。アターは地紋の文字の部分を担当したと考えられる。

[54] 『薔薇園』：この写本は1) に記されている『薔薇園』と同一のものである可能性が高い。1) の『薔薇園』は、バーイソングルの工房の代表作品の一つで同時期に他の『薔薇園』の写本が製作されていたとは考えにくい。

[55] モウラーナー・サアドッディーンが筆写した歴史書：10) の[48] に同一の歴史書と考えられる。

13) モウラーナー・モハンマド・モタッハル [56] は、『王書』[57] の25,000ペイトを写し終えた。

[56] モウラーナー・モハンマド・モタッハル (Mawlānā Muḥammad Muṭahhar)：書家。Mawlānā Muḥammad Muṭahhar Nishāpūriとして知られている書家で、同時期にあたる833年にネザーミーの『五部作』(ハムセ)の筆写を完了させている。

[57] 『王書』：W.M.タクストンは、この『王書』が、モハンマド・イブン・モタッハルがH.833年(1429-30年)に筆写した『王書』(テヘラン、Malik Library)である可能性が高いとしている⁴²⁾。関喜房氏は、マレク図書館が所蔵するこの『王書』は[56]で述べたネザーミーの『五部作』と合本になっていることを指摘している⁴³⁾。

また書家モハンマド・モタッハルの『王書』の書の品等に関して、メフディー・バヤーニーは自身の著作のなかで、「中級」としている⁴⁴⁾。

14) ハージェ・アブドル・ラヒーム [58] は、装丁師 [59]、文様絵師 [60]、テント縫製師 [61]、タイルモザイク師 [62] たちの下絵 [63] に従事している。

[58] ハージェ・アブドル・ラヒーム (Khawājah ‘Abd al-Rahīm)：絵師。装丁師、文様絵師、テント縫製師、タイル・モザイク師など様々な技術の工人のための絵画(タルフ)を描いていたと記されているので、文様の下絵を担当していた可能性が高い。

[59] 装丁師 (mujallid)：写本の表紙製作の全工程に係る工人の総称。

[60] 文様絵師 (mudhahhib)：文様絵画 (tadhhīb) を専門とする画家。文様絵画(タズヒーブ)は「金をおく」というアラビア語から派生している。イスラームの教義が主張する偶像崇拝禁止や生物描写の回避に基づき、『コーラン』の装飾のために非象徴的で、無機的な文様絵画が選ばれたが、初期には金色で描かれたので、タズヒーブという名称が付けられたと考えられている。やがて文様絵画は一般的な写本の装飾にも盛んに用いられ、色彩も紺(ラピスラズリー)、白、赤、緑など濃彩が加わった。文様絵師(モザッヘブ)はタズヒーブから派生した語で、文様絵師の総称。

[61] テント縫製師 (khaymah-dūz)：支配者層の人々が使用するテントの製作や縫製に携わった工人。

[62] タイル・モザイク師 (kāshī-tarāsh)：タイル・モザイクのために下絵に合わせてタイルを削る工人。当時は建築装飾に精緻な文様絵画のタイル・モザイクを施すことが

流行していた。タイルの焼成など窯業に係る工人は陶工 (kāshīgar) と言われた。

[63] 下絵 (tarḥ) : ここでは様々な工芸分野のための下絵と解釈できる。2) [10] 参照

- 15) モウラーナー・サアドドッディーン [64] は、ビギュム [65] の小箱の蓋を終えた。その側面の1つを磨き上げた。残された蓋の面は、あと15日間で終る予定である。

[64] モウラーナー・サアドドッディーン (Mawlānā Sa'd al-dīn) : 木工師。

[65] ビギュム (bigüm) またはベギム (begin) : トルコ系民族では、身分の高い人物の夫人の尊称。しかしどの夫人をさしているかは不明⁴⁵⁾。

- 16) モウラーナー・シャムス [66] は、1つのキャッシュティー [67] を完成させた。そしてハーजूの『詩集』 [68] の1つの長方形装飾 (の中の文字) を書いた。

[66] モウラーナー・シャムス (Mawlānā Shams) : 書家。この人物に関しては二通りの解釈が出来る。長方形装飾の中の文字の部分を担当したと考えれば書家であり、文様を担当したとすれば文様絵師である。しかし次の [67] で述べるようにキャッシュティーがサフィーネやジョングと呼ばれる詩文集と同義であることが判明したので、本文中のモウラーナー・シャムスは書家であり、ハーजूの作品を担当していることも考慮にいれると6) のモウラーナー・シャムスと同一人物の可能性が高い。

[67] キャッシュティー (kashti) : 船を意味するが、内陸部のヘラートで船が建造されるなどとは考え難く、これまで何を意味するか不明であるとされていた。M.K.Özerginは、読み方によって、①船あるいはそれに似た形状の杯や盆、②戦争・レスリング場面、③皮のベルトなどの意味に解釈できるが、17) でキャッシュティーが金泥装飾で描かれる点を指摘しながら、上記3つのいずれにも当てはまらないとしている⁴⁶⁾。W.M.タクストンは、不明な用語としながらも、M.チャンドラの著書においてキャッシュティーが渦巻き草花文を表していることに言及している⁴⁷⁾。関喜房氏は、イランでは、複数の詩人の詩や散文が集められた冊子の呼称にアラビア語のサフィーネ (safīnah) や中国語起源のジョング (jung) があてられ、いずれも船を意味するが、この上申書では、ペルシア語で船を意味するキャッシュティーという語が使用されていると指摘している⁴⁸⁾。キャッシュティーの解釈に関しては、サライ・アルバム の調査・研究の過程において筆者は関氏と意見を交換してきたが、関氏の書誌学的考察と多くの例証から導き出された結果は極めて理論的であり、本論においてもこの解釈を取りたい。「上申の書」において、キャッシュティーは3箇所 (16)、17) 18)) に現れるが、17) で説明するように、その金泥による装飾手法を考えても詩文集と解釈するのが妥当である。

[68] ハーजूの『詩集』 : 工房で、ハーजूの『詩集』が2組同時に製作されていることは考え難く、7) と同一作品の可能性が高い。

- 17) 2つのキャッシュティー [69] に、ハーギー [70] とハターイ [71] が金泥画 (ハッル・カーリー) [72] を施した。

[69] キャシュティー：16) の [67] で述べたように、複数の詩人の作品を集めた詩文集と解釈できる。

[70] ハージー (Hājī)：文様絵師。ハージーは巡礼に行った者に与えられる尊称で、本文では名前は記されていない。

[71] ハターイ (Khatāy)：文様絵師。本文ではハージーと同様に名前は記されていない。

[72] 金泥画 (Ḥall-kārī)：金箔を溶かして作った金泥で描く文様絵画。文様絵画は通常輪郭取りが施されるが、ハッル・カーリーは通常輪郭取りが施されない。しかし輪郭取りが施されるものもあり、それは特にタシュイールと言う⁴⁹⁾。写本の金泥画は、料紙に施される場合と、頁の外枠に施される場合がある。本文の金泥画が、どちらに相当するかは不明である。

18) もう1つのキャシュティーは、アブドッサラーム [73] によって、完成間じかのところまで来ている。

[73] アブドッサラーム (‘Abd al-Salām)：書家。

19) 画家達 [74] は全部で75名。立派な [75] テント (ハルガー) [76] の彩色 [77] に携わっている。

[74] 画家 (naqqāsh)：ナッカーシュはここでは、具象絵画と文様絵画問わず、絵の製作に係る画家の総称として用いられていると考えられる。

[75] W.M. タクストンは、原文の khūb (良い) を chūb (木) と読んでいる⁵⁰⁾。C) で明らかにようにテントの装飾には絵画が描かれていたので、多数の画家がテント装飾に携わっていた可能性は高い。

[76] テント (khargāh)：テント。骨組みは木材、覆いには布やフェルトなどを使用。支配者が使用するテントには、豪華な刺繍、アプリケ、絵画装飾などが施された。

[77] 彩色：‘染料の混合’ (rangāmīz) と ‘洗うような’ (shustmān) で彩色と理解できる。

20) オスタード・セイフォッディーン (師匠) [78] は、病気が回復した。

[78] オスタード・セイフォッディーン (Ustād Sayf al-dīn)：オスタード (師匠) という敬称で呼称されていた人物。

21) ミール・ドウラトヤール [79] の鞍 [80] のための図案 [81] があつた。ハージェ・ミール・ハサン [82] が転写した。ハージェ・ミール・ハサンの息子のミール・シャムソッディーン [83] とオスタード・ドウラト・ハージェ [84] は、螺鈿の細工 [85] に没頭している。

[79] ミール・ドウラトヤール (Mīr Dawlatyār)：画家。

- [80] 鞍 (zin) : 鞍は当時重要な品目の1つで、鞍の装飾にも工夫が凝らされた。鞍本体のほか障泥なども含まれると考えられる。
- [81] 図案 (tarḥ) : この場合の tarḥ は、鞍の図案の下絵。
- [82] ハージェ・ミール・ハサン (Khawājah Mīr Ḥasan) : おそらく木工または螺鈿師。
- [83] ミール・シャムソッディーン (Mīr Shams al-dīn) : 螺鈿師。
- [84] オスタード・ドウラト・ハージェ (Ustād Dawlat Khawājah) : 螺鈿師の師匠。
- [85] 螺鈿の細工 (ṣadaf-tarāshī) : 貝などを下絵に合わせて削り、板に嵌める螺鈿細工。

22) 卑しき僕、最も価値無き取るに足らぬ者 [86] は、『王書』[87] の写本の3部半を終えた。『魂の歓び』(ノズハトルアルヴァーフ) [88] の写本に着手した。

- [86] 卑しき僕、最も価値無き取るに足らぬ者 : 「上申の書」の執筆者と考えられているジャアファル・バーイソングリーをさす。
- [87] 『王書』 : M.K.オゼルギンはこの『王書』が前出の2)、5)、10、13)とは別の写本であり、ゴレスターン宮殿図書館蔵、H.833年にジャアファルが筆写をヘラートで完了した『王書』であることを述べている⁵¹⁾。W.M.タクストンも同様の主張である⁵²⁾。
- [88] 『魂の歓び』(Nuzhat al-arwāḥ ノズハトル・アルヴァーフ) : アミール・サーダート (Amīr Sādāt)、ホセイーン・サーダート (Ḥusayn-i Sādāt)、ミール・ファフロツサーダート (Mīr Fakhr al-Sādāt) などの号で知られた神秘主義者および詩人のロクノッディーン・ホセイーン・イブン・アーレモルホセイニー (Rukn al-dīn Ḥusayn b. ‘Ālim al-Ḥusaynī) (1272-1329?年)の著作。M.K.オゼルギンは、本文中の作品の所在は不明としている⁵³⁾。

23) 祈りを捧げるので、手短に終えよう。祈りより良いものを行うことができようか。
国が永続するように。モハンマドと一族のために。

(B) 王の建築物

アッラーが、その柱を終末の日まで堅持するように

- 1) 宮殿 [1] (において) は、石を切る作業 [2] が終わった。タイルを削る作業 [3] の内、銘文 [4] 部分と、壁頂部 [5] の作業が続いている。通路 [6] の敷石が完成した。絵画の館 [7] の歯状飾り [8] がはめ込められ、突き出たバルコニー [9] が付けられた。

- [1] 宮殿 (dargāh) : 宮廷高官の館、宮廷の前の中庭、大門などを意味する。本文では宮殿としたが中庭とも解釈できる。
- [2] 石を彫る作業 (sang-tarāshī) : 一般的に石を切る、彫る作業である。本文では建築装としての浮き彫りや透かし彫り、あるいは石材の調整などのいずれにも解釈が可能である。
- [3] タイルを削る作業 (kāshī-tarāshī) : 当時はタイル・モザイクが建築装飾として主流

をなしていたので、ここでは焼成されたタイルを図柄に合わせて切る作業と考えられる。

[4] 銘文 (kitābah) : 建造物の建設由来を記述した部分で、通常建築表面に準じた素材で書かれる。

[5] 壁頂部 (kungurah) : 建造物の最上部。建物の最上部の装飾的壁面、装飾的小塔など。本文では前者と解釈した。[96] も参照。

[6] 通路 (mamarr) : 建物の中における通路、橋などを意味する。

[7] 絵画の館 (ṣūratkhānah) : 絵画が描かれた、あるいは絵が掛けられた絵画の間。

[8] 歯状飾り (dandān) : 建造物の壁の上部などに付けられた歯状の飾り。

[9] バルコニー (mukhārajah) : 建造物に取り付けられる出っ張った部分やバルコニー。

2) 旧宮城 (において) は、ドーム、ドームの裾の部分とモカルナス [10] の下部まで文様絵画 [11] が施され、東側の柱が建て替えられた。

[10] モカルナス (muqarnas) : 壁や支柱の隅の天井部などに生じる局面を埋める鍾乳型装飾。

[11] 文様絵画 (naqqāshi) : 写本を飾る文様絵画はタズヒーブと言われるが、それらが拡大されて、建築や工芸の装飾に用いられた文様絵画はナッカーシーと言われる。

3) 画家たち [12] の為に建てられた図書館 [13] が完成した。画家と書家 [14] たちが移った。

[12] 画家 (naqqāsh) : ナッカーシュは、文様絵師や具象絵師などを含む画家の総称。。

[13] 図書館 (kutubkhānah) : 支配者階級の図書館は、単に蔵書を納める場所だけでなく、写本、装丁、工芸、建築装飾などあらゆる創作の工房が付属していることが多かった。

[14] 書家 (kātib) : 能書家だけでなく文書の作成などを行う書記なども含めた書家の総称。

4) 石彫師たちは、池の仕事に没頭している。

5) 新しい庭園において、6層と申し付けられた壁は、ある部分は4層、ある部分は3層になり、作業が続いている。エイヴァーン [15] と通路 (ダーラーン) [16] が建てられ、エイヴァーンの前の最重要な橋 [17] が下ごしらえされ、設置されるであろう。?

[15] エイヴァーン (aywān) : 大アーチ型開口部のある大広間

[16] ダーラーン (dālān) : 通路。

[17] シャー・ポル (shāh pul) : 大きな橋、欄干。

6) 広場の庭園 (において) は、キブラの壁が3層になった。石の館の作業を終えたタイルモザイク師たちは、前述の庭園の腰壁 [18] に従事するであろう。

[18] 腰壁 (izārah) : 部屋内外のに設けられる低い腰壁。

7) 鷺小屋 [19] の天井の土塗り、床の土と壁塗りが終わった。

[19] 鷺小屋 (kulang-khānah) : コラング (kulang) は鶴、鷺などを意味するが、当時の造形作品には鷺を表したものは多く、当該詩画帳にも鷺を画題とした絵が多く含まれている。鷺が宮廷で飼育されていた可能性も高い。

(C) テント

1) 円錐部分 [1] の支柄部 [2] の14部分と、円筒部分 [3] の7つ、合計21部のうち6つが終わった。

[1] 原文では3文字からなる単語であるが、最初に、be, pe, te, th, nūn, ye のいずれかの文字があてられ、次に (eyn, gheyne, fe, qāf のどれかが書かれ、最後のheの文字のみが明らかになっている。しかし、M.K.オゼルギンは上記のいずれの文字列にも属さない“te”“be”“he”の文字列で読み、解釈している。また、W.M.タクストンとI.アフシャールはyaqah (襟) と読んでいる。

[2] 支柄部 (turluq) : テントの屋根にあたる円錐形を構成する部分⁵⁴⁾。

[3] 円筒部 (bawzah) : 木の幹や本体を意味する。テントでは支柄部の下部にあたる円筒型胴部と考えられる。ただし、原文ではbawrahと記されている。

2) そして(補強用の)革の部分が縫われた。

3) そして線で区切られたパーツ [4] に描かれる太陽文様は合計21で、そのうち6つが完成した。

[4] パーツ (kit'ah) : 部分を意味する。

4) 矢飾り (ショラフ)、メフバス文様 [5]、縁飾り (ハーシエ) が、ほぼ1ダーング半 [6] 縫われた。

[5] メフバス (miḥbas) : どのような文様か不明。

[6] 1ダーング半 : 1ダーングは六分の一。

5) その素材が木綿 [7] であり、その文様(の部分が)が光沢のある薄い布 [8] に描き出され、その縁に金の房 [9] が施されるテントの外側の作業は、ほぼ1ダーング半縫われている。(工人達は)完成に向けて勤しんでいる。

[7] 亜麻 (miṣqāl) : 厚手の粗い亜麻⁵⁵⁾。

[8] 光沢のある薄い布 (ṣandal-bāf) : 西トルキスタンで織られた光沢があり、薄く、柔らかな木綿⁵⁶⁾。

[9] 金の房 (zar jiqqah) : 原文ではḥ?qqah と書かれているが、M.K. オゼルギンやW.M. タクストン、I. アフシャールは皆jiqqah と捉えている。

6) 国が安泰であるよう。

IV. サライ・アルバムにおける「上申の書」の意義

筆者が研究しているサライ・アルバムの中の2冊の詩画帳は、イスラーム美術史の研究の対象となって1世紀を超えながら、依然として不明瞭な点が多い。詩画帳の編纂を命じたのは、注1で記したように白羊朝君主ヤアクーブ・ベクであるとするZ.V. トガンの説がほぼ定説となっている。しかし、ヤアクーブ・ベクの死後に書かれた作品も貼られている。例えば、最も新しい年代の作品として能書家シェイフ・モハンマドの名前が残されたH.917年(1511年) H.2153.f.55bがある。また2冊の詩画帳がオスマン帝国に献上された記録はなく、現在のところ、オスマン帝国スルタン・セリム1世が、1514年にサファヴィー朝と戦ったチャルディラン戦役で得た戦利品の一つとする説が有力であるが明確な根拠はない。

また2冊の詩画帳の原初の形態も明らかではない。オスマン帝国に所蔵されてからも貴重な書籍として国庫管理となり、最終的に、アブデュル・ハミト2世(1876-1906年)によって西洋的な製本がなされた。H.2153に関しては、その製本の劣化から、各フォリオが、ガラス付きの額に入れ保存されている。

また2冊の詩画帳に貼られた作品個々の作者、製作地、製作年代に関しても不明な点が多い。2冊の詩画帳の作品の総計は2158点を数える。H.2153では、書が680点(内、切り紙による書44点)、絵画が576点(内、切り紙による絵画41点)、H.2160では、書が769点(内、切り紙による書2点)、絵画が133点の作品が貼られている。書の作品においては、奥書のあるものもあり、書家、製作地製作年代が判明している作品もある。しかし絵画においては製作地や製作年代を判断する手掛かりは皆無である。また画家の署名が残されている作品はあるものの、後世の書き込みが多い。2冊の詩画帳の作品の製作地に関しては、イラン、アフガニスタン、中央アジアのイスラーム文化圏、製作年代に関しては14世紀後半から16世紀初頭という大雑把な解釈がされるのみである。

詩画帳では書と絵画が混在して貼られているにも関わらず、これまで書と絵画の関連性はないとする意見が大勢をなし、書と絵画の関連が論じられることは無く、書の精緻な分類や解説も行われなかった。

このような状況の中で、詩画帳が作成された目的も明確にはされていない。作成意図としては、書と絵画が無作為に貼られていることから、工房に何らかの理由で残された手本となるような作品や断片が、散逸することのないように台紙に貼はられ、粉本とされたのではないかという説が現在のところ一般的である。

サライ・アルバムの先行研究は数多いが、従来の研究は作品個々の研究であり、同系、類似作品の比較研究が主流を占め、詩画帳そのものとの関連のなかでの作品研究はない。詩画帳に貼られている作品は、書と絵画に関連性が認められないとされているだけでなく、納められている全ての作品が無作為に選出され、何らかの意図をもって詩画帳を構成するために選ばれた

ものではないとこれまで考えられてきた。しかし、実際にそうであろうか。

筆者が代表者を務めた2回の科研費研究（平成13～15年、平成18～20年、基盤（B）（1））において、サライ・アルバムの2冊の詩画帳（H.2153, 2160）の総合的な調査を進めていくうちに、これまで主張されていた書と絵画の関連性の無さ、作品の無作為な選択などの定説に、多少の疑問が生じてきた。この間、共同研究者の関喜房氏によって、初めて2冊の詩画帳の総ての書の総合的データが完成した。その業績が、詩画帳作成の意図や貼られている絵画と書（詩、散文、文書類など）の詩画帳との係わりなどに新たな研究課題を開くことは間違いない。

ここでは、「上申の書」が、サライ・アルバムH.2153の詩画帳の中でどのように位置づけられるか、どのような意義を有するかを簡単に述べたい。それは、詩画帳と「上申の書」の関連性を論じる新たな研究課題の提唱である。

この「上申の書」と詩画帳との係わりに於いて第一に挙げられるのは、筆者である書家の問題であろう。当該「上申の書」が、ジャアファル・バーイソングリーに帰せられると解釈されていることに関しては、序で述べた。ジャアファル・バーイソングリーは、ティームール朝前半の能書家として著名であり、また芸術の保護者であったバーイソングルの図書館長の地位にあった。彼はナスターリーク書体の正統的継承者であり、それを後世に伝授した最高の功労者であった。H.2153の詩画帳には、ジャアファル・バーイソングリーの書が、「上申の書」以外に20点存在する。詩画帳を編纂させた白羊朝のヤアクーブ・ベクが、ティームール朝15世紀の前半の能書家のジャアファル・バーイソングリーの作品を重要視したことは当然といえよう。

H.2153の詩画帳には、当該「上申の書」のほかに、3点の上申の書が存在する。ジャアファル・バーイソングリーの「上申の書」と同じフォリオの裏面f.98bには、ソルターン・アリーの「上申の書」、f.119bには、シェイフ・モハンマドの「上申の書」、f.137aには、シェイフ・マフムードの「上申の書」が貼られている。これらの3点は、個人的な嘆願書にちかいものであり、ジャアファル・バーイソングリーの「上申書」のような、公的な上申書ではない。これら3点の筆者はいずれも能書家であり、ジャアファル・バーイソングリーの「上申の書」と同様に、能書家の作品として収集されたことも考えられるが、一方で、詩画帳にこのような私文書的な内容の作品が掲載されること自体に、詩画帳作成の広域にわたる収集のカテゴリーが読み取れる。

白羊朝ヤアクーブ・ベクの時代にティームール朝の芸術は、ヘラートを中心に全盛期を迎えていた。自ら芸術に造詣が深かったヤアクーブ・ベクが、ティームール朝前半期の高揚期の工房の動向や作業状況を著したジャアファル・バーイソングリーの「上申の書」に関心を寄せたことは当然であり、「上申の書」がヤアクーブ・ベク自身の白羊朝の工房の活性化に指南的要素を与えた可能性は高い。このような視点から考察すると、ジャアファル・バーイソングリーの「上申の書」は、書画の粉本的作品を収集した詩画帳において、白羊朝時代の伝統的イスラーム芸術の概念の一端を暗示する作品と位置づけることも可能である。

V. 結びにかえて

IV.ではジャアファル・バーイソングリーの「上申の書」を詩画帳の中で位置づける試みを行ったが、詩画帳の他の多くの作品との関連性などを考察することも必要で、まだ多くの研究課

題を残していることも付け加えねばならない。

和訳に於いては、先行研究において不明瞭あるいは解釈不明とされていた箇所を明らかにした。絵画・工芸の用語に関しては、ティームール朝を中心とした現存する美術工芸品、絵画に描かれた情報、文献資料などから総合的に解釈した。装丁に関しては関喜房氏の研究に負うところが多い。和訳において明瞭になった主な項目と解釈は以下の通りである。

文様絵画に関して：(A) 4) [14~19]：(A) 12) [53]

装丁に関して：(A) 5) [23, 26, 27]：(A) 8) [38]：(A) 9) [44]

書物の種類（キャッシュティー）に関して：(A) 16) [67]

テントの絵画に関して：(A) 19) [75]

テントに関して：C) 1) [1]：(C) 5)

用語の解釈は、15世紀前半のティームール朝ヘラートの芸術の解釈には、極めて重要である。書、絵画、装丁、料紙、建築装飾、テント、その他諸工芸などの用語を詳細に解釈することは、時代の芸術の概念の考察にも繋がるが、それは今後の研究課題としたい。

註

- 1) サライ・アルバムの通称で呼ばれる4冊の詩画帳の登録番号はH.2152、H.2153、H.2154、H.2160である。Z.V.トガンは、編纂を命じたと考えられる支配者の名前を取って、H.2152はバーイソンゴルの詩画帳、H.2153と2160はヤアクーブ・ベクの詩画帳、H.2154はバフラー・ミールザーの詩画帳と命名した。Z. V.Togan, “Topkapı Sarayında dört cöng”, *İslâm Tetkikleri Enstitüsü Dergisi*, vol.I (1954), pp.73-89
H.2153とH.2160は、筆者が文科省科学研究費で1998年からトプカプ宮殿美術館で日本とトルコの研究者で共同研究を継続させている作品である。作品点数は、H.2153では書が680点、絵画が576点、H.2160では、書が768点、絵画が134点である。
なお筆者が研究代表者を務めた平成14～16年の科研費基盤(B)(1)「イスラーム世界の詩画帳に関する文化史的・芸術的視点からの総合研究」の主な日本人研究者は杉村棟、村野浩、小柴はるみ、関喜房、トルコの研究代表者はトプカプ宮殿美術館前館長F.チャーマンである。
- 2) これらの詩画帳は厚い台紙に書や絵画が貼られたもので、単独の作品もあるが、写本の頁の一部や、断片的な作品も多い。書や絵画の粉本として制作された可能性が高い。
- 3) 4冊の詩画帳の研究史に関しては、ed.E.J.Grube & E.Sims, *Between China and Iran*, New York, 1980
- 4) 4冊の詩画帳の書に関しては、Z.V.Togan, 1954
- 5) 全訳はW.M.Thackston, *Album prefaces and other documents on the history of calligraphers and painters, Supplements to Muqarnas*, vol.X, Leiden, 2001, pp.11-17; L.Binyon, J.V.S.Wilkinson, B.Gray *Persian miniature painting*, Appendix I. “Düst Muhammad’s account of past and painters”, London, 1971 (1st ed.1933), pp.183-188 (抄訳); M.Bayānī, *Ahvāl va āthār-i khush-navīsān*, Tehrān, 1-2, 1363SH, pp.192-203
- 6) M.K.Özergin, “Temürlü sanatına âit eski bir belge:Tebrizli Ca’fer’in bir arzı”, *Sanat Tarihi Yıllığı*, vol.VI, 1976, pp.471-518 ほま原寸大の原文のコピーが添付されている。
- 7) W.M.Thackston, Leiden, 2001, pp.43-46
- 8) I.Afshār, “‘arṣah-dāsh-t-i mulāzīmān-i kitābkhānah”, *Barg-i bi bargi*, 1378SH, pp.277-285
- 9) A.Pārsāy Quds, “Sanadī marbūṭ bah fa’āliyatī-hā-yi hunarī-i dawrah-i Timūri dar kitābkhānah-i Bāysunghuri-i Harāt”, *Hunar va mardom*, No.175, pp.42-50
- 10) T.W.Lentz and G.D.Lowry, *Timur and the princely vision:Persian art and culture in the fifteenth century*, Washington, 1989
- 11) *ibid.*, Cap.III The kitabkhana and dissemination of the Timurid vision.pp.159-216

- 12) M.K.Özergin, p.479; W.M.Thackston, p.43
- 13) M.K.Özergin, p.479
- 14) 作品点数は、注1で述べた調査の研究成果として出版を予定している2冊のカタログのため関喜房氏が作成した書家索引による。
- 15) M.K.Özergin, p.480
本文においての年代表記は、ヒジュラ暦と西暦を併用でしている。ヒジュラ暦はH.を付けて表記している。
- 16) 井筒俊彦『コーラン』岩波文庫
- 17) W.M.Thackston, 2001, p.43; I. Afshār, 1378SH, p.278; M.K.Özergin, p.494; A. Pārsāy Quds, p.49
- 18) *Kullīyāt-i Sa'dī*, Dhukā' al-Mulk-i Furūghī(ed.), Tehran, Sāzmān-i Chāp va Intishārāt-i Jāvidān, 1351SH. p.555
- 19) この書家・画家列伝は『バフラーム・ミールザーの詩画帳』（1544年）（トプカプ宮殿美術館H.2154）の序文として書かれた。本論においては、以下ドゥースト・モハンマド著「書家・画家列伝」と表記する。著者のドゥースト・モハンマド（1531-64年）は、サファヴィー朝第2代シャー・タフマースプ（1524-76年）の弟バフラーム・ミールザー（1517-49年）に仕えた書家で彼の工房長であった。この「書家・画家列伝」は、ジャアファルの記した本「上申の書」から120年以上を経ているが、著者ドゥースト・モハンマド自身が写本製作工房の長という立場から、その技術用語の用法などに関しても貴重な資料の1つである。
- 20) M.K.Özergin, p.500
- 21) W.M.Thackston, 2001, p.44
- 22) *ibid.*, p.44
- 23) Dūst Muḥammad、トプカプ宮殿美術館H.2154, f.15a
- 24) M.K.Özergin, pp.500-501
- 25) *ibid.*, p.501
- 26) ハージェ・ギヤーソッディーンの報告書原文と英訳は、W.M.Thackston, 2001, p.p.53-67、原文出典に関してはnote6
- 27) T.W.Lentz and G.D.Lowry, p.190, p.237 いずれも cat.no.146の図を参照
- 28) Dūst Muḥammad, トプカプ宮殿美術館H.5124, fol.15a
- 29) 関喜房 訳・解説『夢の花園』“用語解説”、テヘラン、1997, p.143
- 30) M.K.Özergin, p.505、W.M.Thackston, 2001, p.44
- 31) M.K.Özergin, p.505
- 32) W.M.Thackston, 2001, p.45
- 33) M.K.Özergin, p.505 M.K. オゼルギンは作品を『選集』（Anthology）としている。
- 34) W.M.Thackston, 2001, p.44
- 35) M.K.Özergin, pp.505-506
- 36) ナツカーシュ＝具象絵師：モサツヴェルともいう。文様絵画を描く画家に対し、具象的な事物、物語性のある場面などを描く画家。ナツカーシュは、写本の文様絵画であるタズヒーブを壁面などに拡大して描く文様絵師に対しても使用される。
- 37) 装丁師は製本作業だけでなく、表紙の装飾に携わる工人も含む。
- 38) W.M.Thackston, 2001, p.44
- 39) *ibid.*, p.44
- 40) バルアアミー（974年没）は、サーマーン朝宰相で、タバリーのアラビア語の歴史書（*Tārīkhū'r-ru'ūl wa'mulūk*）をH.352年（963-4年）にペルシア語に抄訳した。
- 41) W.M.Thackston, 2001, p.44
- 42) *ibid.*, p.44
- 43) この件に関しては、関喜房氏が2008年3月にマレク図書館で確認したものとして、本人から筆者に伝えられた。
- 44) Mehdi Bayāni, 1363SH.p.838

- 45) M.K.Özergin, pp.507-508
- 46) ibid., p.508
- 47) W.M.Thackston. 2001, p.44
- 48) 関喜房、“モラッカの序文における諸問題”、2001年3月にイスタンブールのトプカプ宮殿美術館におけるサライ・アルバム研究会での発表。
- 49) 関喜房、1997, pp.128-129
- 50) W.M.Thackston, 2001, p.43
- 51) M.K.Özergin, 2001, p.510
- 52) W.M.Thackston, 2001, p.45
- 53) M.K.Özergin, p.510
- 54) C.E.Arseven, Sanat Ansiklopedisi, İstanbul, 1983, cilt I, p.356
- 55) M.K.Özergin, p.516
- 56) ibid.,p.516